

中国長春市における日本庭園作庭とその意義

福原成雄

はじめに

長春市は中国吉林省の省都で、吉林省の政治・文化・産業・流通の中心地であり、中国東北三省（黒龍江・吉林・遼寧省）の交通の要所でもある。

長春市は戦前、新京市と呼ばれ、多くの日本人が生活しており、戦後50年を経た今日でも、長春を故郷として日本から毎年4万人の人々が訪れている。

1980年10月に長春市と仙台市が姉妹都市を締結し、1987年6月に吉林省と宮城県が友好県省を締結している。さらに、大津市と長春市は1984年から相互に訪問をするなど友好都市として交流を深めている。

過去の不幸な歴史を教訓として同じ過ちを二度と繰り返さないため、そして日中両国民の相互理解をさらに深

めたいとの願いから当初、長春市人民対外友好協会と日本長春会との合意で長春に日中友好国際交流センター建設が計画された。1995年には長春日中友好会館建設委員会が設置されて募金活動が行われ、さらに日本側の資金協力窓口及び運営協議に日本長春会、仙台市、大津市、金ヶ崎町、九州ブロックおよび各都市日中友好団体、企業が協力して進められた。中国側の資金調達及び管理、運営には長春市外事弁公室、長春市人民対外友好協会、吉林省人民対外友好協会が当たり長春市人民政府が全面的に協力して進められた。建設場所は長春市経済技術開発区に、総工費10億6250万円をかけて建設された。「日中友好会館」の日本庭園は、1997年の夏、大津市長が建設現場を視察した際に会館中庭の日本庭園設計を依頼されたことによる。(図-1)(写真1・2)

日本庭園の設計に当たり現地調査と併せて既存の日本

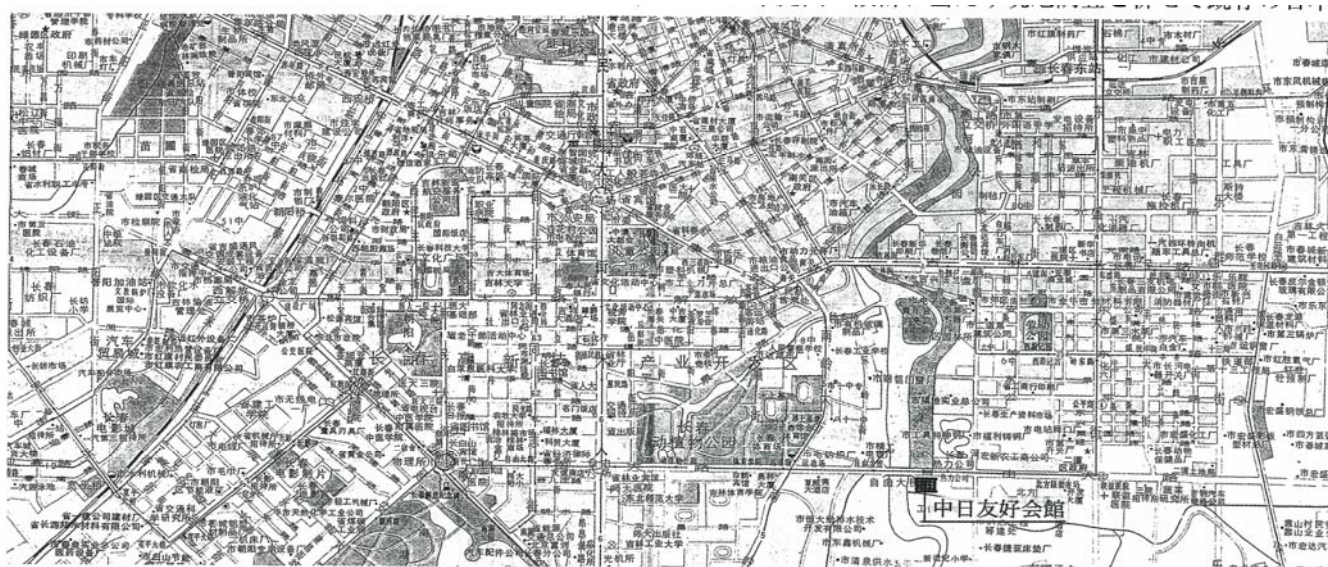


図-1 位置図



写真-1 中庭現況 98.3



写真-2 中庭現況 98.3

庭園についても調査を行い、そして日本庭園の作庭を通して知り得たことから今後の中国都市緑化事業に与える意義について考察を行った。

1. 長春市で作庭されている日本庭園

1) 宮城・吉林友誼園

平成9年(1997年)に宮城県と吉林省の友好県省10周年を記念して、吉林省長春市長春動植物園内に宮城・吉林友誼園が建設された。昭和62年(1987年)6月に吉林省と宮城県が友好県省を締結し、数々の交流を通し友好に努め、交流効果を踏まえ、更に、将来に向けて友好が発展することを願って、その友好関係を具体的な形として記念する両県省の共同事業として建設費831万元(約1億円)をかけて面積約1.3haの池泉回遊式日本庭園が建設された。建設に先立ち平成4年には吉林省から

造園及び建築の技術者2名を、宮城県にて1年間受入れて造園の実施研修を行っている。建設は平成8年4月から平成9年7月の2カ年で宮城県造園建設業協会のメンバーが1回3人のチームとなり6回長春を訪れ、石組み、植栽等の造園や日本家屋の建築について技術協力を行っている。平成10年8月から平成11年1月まで、長春市動植物公園の造園技術者1名を宮城県が受入れ、宮城県造園建設業協会にて維持管理の技術研修を行っている。

宮城・吉林友誼園の日本庭園は、池を中心に園路や広場、滝から流れ出す川、岩組の海岸、飛石、八つ橋、及び家屋などで構成されており、松島、三陸海岸、北上川、阿武隈川、大崎平野そして有備館など、宮城県の原風景を実感できる公園とするものである。また、有備館をイメージした日本家屋では、広縁に座って築地塀に囲まれた枯山水を眺め、畳や障子に触れることにより、日本の生活文化を感じることができる。植栽は、冬期の気温が



写真-3 池の景 98.3



写真-4 池の景 98.7

厳しいため、樹種が限定され、クロマツ、アカマツ、カラマツ、トウヒ等の針葉樹に、ヤマザクラ、シラカバ、ニレ等の落葉樹を組み合わせている。

筆者が友誼園を最初に訪れた3月は冬期のため閉門中で人の姿もなく、木々は落葉して池の水も抜かれ荒涼としていた。しかし、7月に再訪したおりには木々の緑も生い茂り、池には水が湛えられ見違える美しきであった。

(写真-3・4)

2. 日中友好会館日本庭園の作庭

1) 建設経過

大津市公園緑地課より中国長春市中日友好会館日本庭園の設計、施工監理について筆者に依頼があり、まず初めに1998年3月26日～4月2日にかけて現地調査、設計協議、材料調査を行った。それに基づいて4月、5月にかけて実施設計を行ない、実施設計により長春市で入札が行われ日本庭園の工事を経験している市内の造園業者が請け負った。1998年6月6日～6月12日にかけて石組石材、樹木の選定、建設協議を行ない、続いて1998年6月23日～7月7日にかけて荒造成工事、埋設工事の完了にともない石組工事の施工監理、引き続き1998年7月18日～7月31日にかけて植栽の施工監理を行った。全体の仕上げは心半ばで長春市の造園業者をお願いし、1998年8月23日開館式が盛大に執り行われた。

2) 設計について

長春中日友好会館日本庭園は、周囲を建築棟に囲まれた面積約2400㎡の中庭に計画された。大津市との打ち合わせでは、庭園内容は完成が8月と工期が短いこと、建設費を抑えること、後々の維持管理にお金がかからないこと、長春の冬は寒く、池の水を抜いてしまうこと等により日本の代表的庭園様式である枯山水の庭とした。

当初の計画案は、庭園を通じた文化交流、技術交流を図る目的から日本庭園と中国庭園が接する計画案2案の作成を行った。しかし、現地調査と材料調査、設計協議のため訪中しての、長春市との第一回設計協議により、中庭を日本庭園と中国庭園で計画することは、境界部分の処理、また、中国庭園にするには面積が狭すぎることを

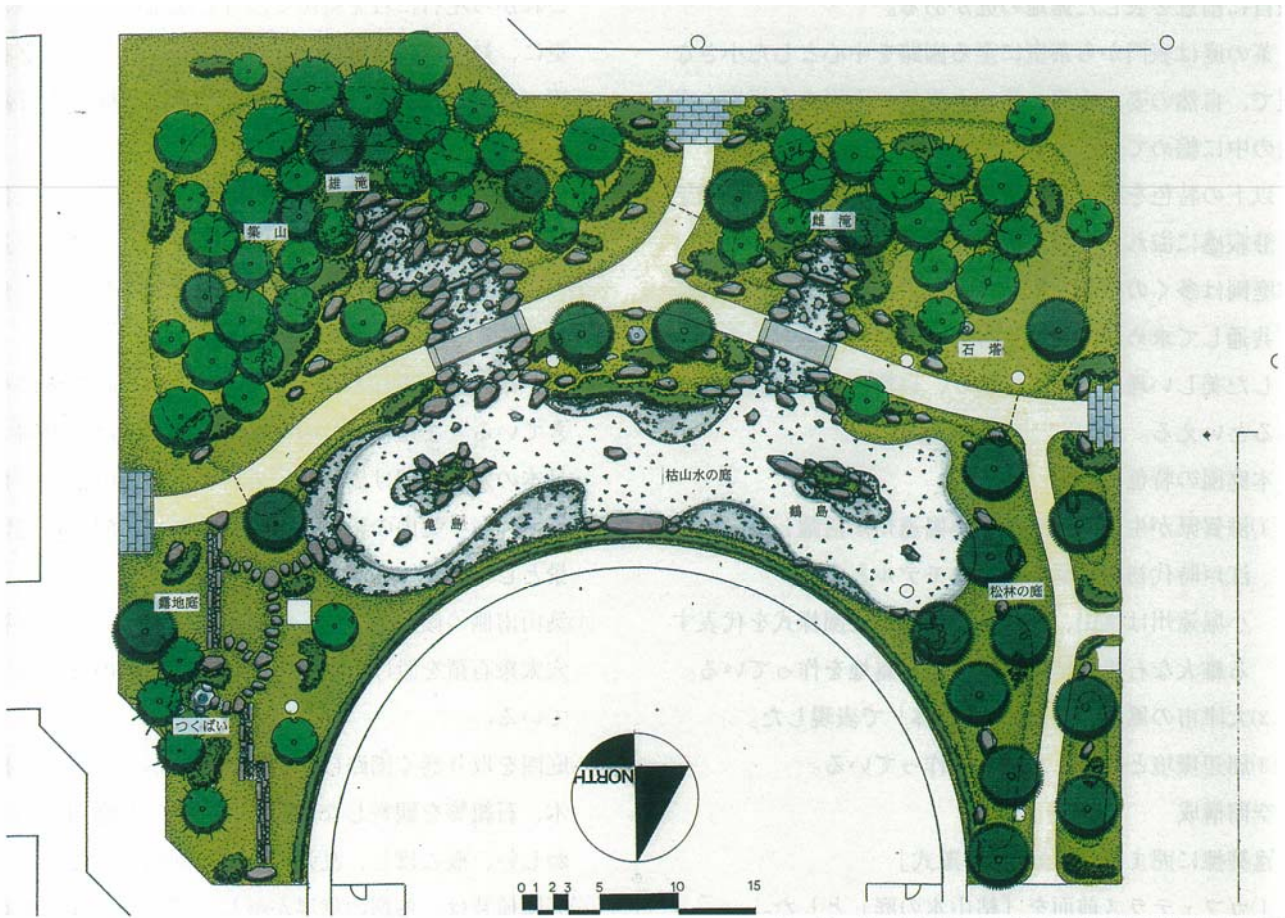
さらに、中国庭園は別の場所に計画を考えていること等により中庭全域を日本庭園として設計し、会館前面の前庭は日本をイメージできる庭園にすることとなった。そこで急遽、長春市に製図台と製図用紙を手配していただき中庭全域を日本庭園とする計画案の作成を行い、滞在中に長春市と計画案について再協議を行い実施設計平面図の決定を行った。

3) 基本方針

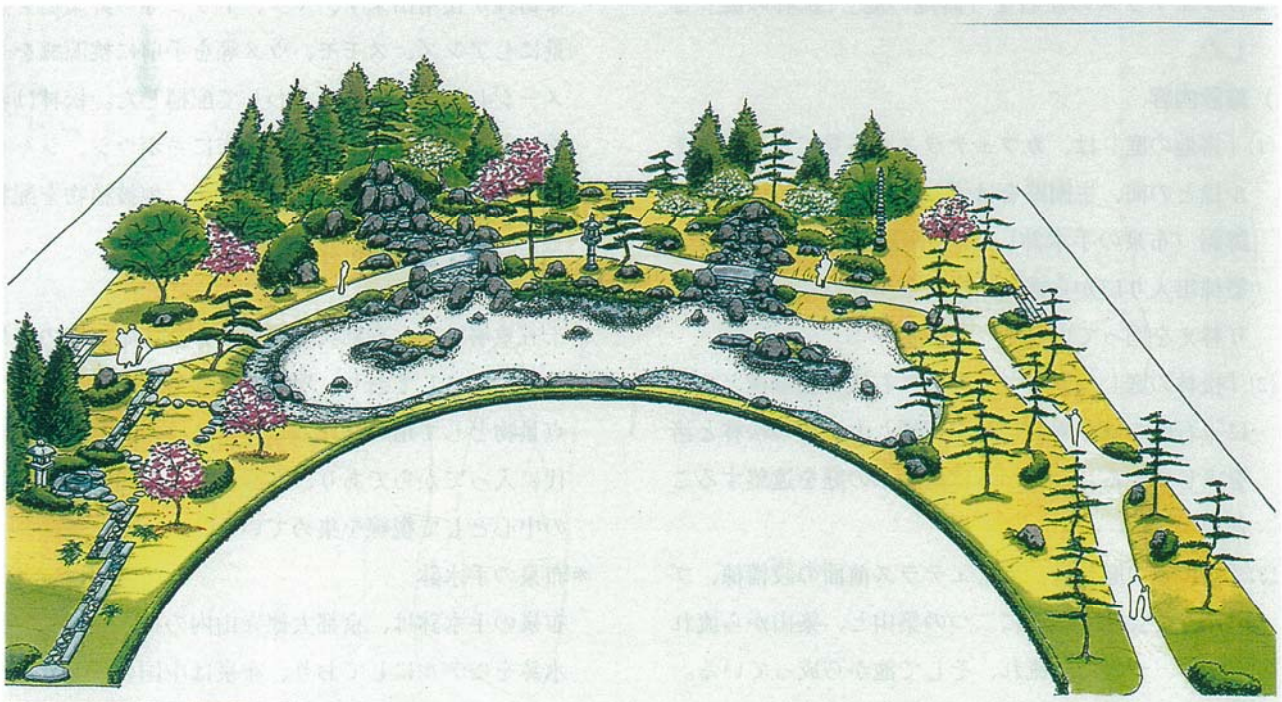
設計の内容は、中日友好を図るべく日本庭園の伝統によって養われた「美」と日本の心を紹介し、会館を訪れる多くの人々、長春市の人々に安らぎの場を提供することを目的とし、「枯山水の手法による水の流れに、長春市と大津市の繁栄と時の流れを超えた友好を象徴させる」ことを意図とした。このため、その景観構成は、計画地諸条件、設計条件等により多くの会館利用者が観賞、散策できる回遊式で「枯山水」と呼ばれる様式の庭園とした。自然の風景の要素を人工の山、石庭で表現し、その枯池や、枯流れの周辺を散策しながら石庭風景、植栽風景を眺め楽しみ、心の安らぎを得る意匠とするもので本計画では、山水のモチーフを琵琶湖を眺める比良山系として「築山」、その山々より流れる溪流を「枯滝」「枯流れ」そして大津市のシンボル琵琶湖を「枯湖」として表している。枯湖には、日中友好と、大津市と長春市の繁栄を祈念して鶴島、亀島を配置している。園路、灯籠、水鉢等の細部意匠は、滋賀県が生んだ江戸時代初期の偉大な作庭家、小堀遠州が作庭した京都大徳寺孤篷庵庭園、南禅寺金地院庭園をモデルにした。(図-2・3)

4) 庭園意匠

本庭園は、長春中日友好会館中庭のカフェテラス前面に中日友好を祈念して日中共同で日本庭園が作庭された。庭園意匠は、桃山時代から江戸時代初期に活躍した滋賀県が生んだ偉大な作庭家、小堀遠州の庭園イメージと、大津市の風景をカフェテラスを中心に「露地」、「枯山水」、「松林」で表象している。この時代の庭園の特色には、京都醍醐寺三宝院庭園や小堀遠州が作庭した京都大徳寺孤篷庵、南禅寺金地院の庭園のような城郭建築の力強さを取り入れ、雄大な石組を有する林泉式庭園、枯山水庭園があり、また一方では、千利休が完成させ小堀遠州が



図一2 中国長春市日中友好会館日本庭園全体計画平面図



図一3 中国長春市日中友好会館日本庭園スケッチ図

独自に創意を表した露地の庭がある。

茶の庭は表門から茶室に至る園路を中心とした小さな庭で、自然の姿、山間の景、大自然の面影を小規模な露地の中に縮めて表したものである。

以上の特色を踏まえて、カフェテラスを中心に躍動感と静寂感に溢れ、且つ多様・多彩な庭園空間とした。日本庭園は多くの様式を生み出しているが、何時の時代にも共通して求め続けているものは、自然風景をモチーフにした美しい理想の世界であり、自然の再現、理想化であるといえる。

*本庭園の特色

- (1) 滋賀県が生んだ作庭家、小堀遠州が活躍した桃山、江戸時代初期の庭園様式をモデルとした。
小堀遠州は桃山、江戸時代初期の庭園様式を代表する雄大な石組の枯山水庭園と、露地を作っている。
- (2) 大津市の風景を「湖岸」「松林」で表現した。
- (3) 周辺環境と調和した空間を作っている。

*空間構成

「建築棟に囲まれた中庭」「回遊式」

- (1) カフェテラス前面を「枯山水の庭」とした。
- (2) カフェテラスの左右を「露地の庭」「松林の庭」とした。

5) 施設内容

- (1) 「露地の庭」は、カフェテラスから見て左側にホテル棟との間、主園路をはずれた部分に、延段、飛石、蹲踞（布泉の手水鉢）、織部燈籠等を配置し、各建築棟出入り口から露地の緻密な空間へ誘い、心の切り替えを図っている。
- (2) 「松林の庭」は、カフェテラス右側の会議棟との間に玉石敷の園路両側に松を配植し大津市の松林と渚を表している。ここからは枯山水の庭を遠望することが出来る。
- (3) 「枯山水の庭」は、カフェテラス前面の設備棟、プール、宴会棟との間に二つの築山と、築山から流れ落ちる二つの滝、流れ、そして池から成っている。庭は桃山時代の石組の特色である雄大さを表した枯山水の庭としている。
また、庭園の左は立石により雄大な枯滝（雄滝）を、

これから左右に石を組んで溪谷と溪流を作っている。更に、対照的に右を伏せ石を多用して落ち着いた枯滝（雌滝）としている。日本では雄滝、雌滝の石組により、所有者の子孫繁栄の願を表している。池には、左右に亀島、鶴島の中島（神仙島）を配置している。神仙島を表現する庭園様式は、庭を永遠の表象として、その所有者に祝福、長寿を与える意味を持っている。

松、鶴、亀は瑞祥として今日なお日本人の生活に生きている。また、二つの滝に架かる石橋は、中国と日本の友好の架け橋を表している。庭園中央に六角燈籠、右手築山の斜面には十五重層燈を配置し庭園景としている。

- (4) 築山南側の傾斜地には、大津市坂本の代表的な石積、穴太衆石積を設け、低木を植栽して山地の様を表している。
- (5) 庭園を取り巻く園路は、各庭園を結ぶとともに、樹木、石組等を観賞しながら散策を楽しむ庭園にふさわしい、霰こぼし、乱張り舗装の園路とした。
- (6) 庭園植栽は、冬期の気温が厳しく日本のように多様な樹種が使用出来ず、マツ、トウヒ等の針葉樹を背景にしアズキ、スモモ、ウメ等を手前に桃源郷をイメージして滝、流れにそわして配植した。松林は赤松（美人松）を主体にし、林床にギボウシ、シヤクヤク、ボタン、オニユリ等の草花、地被植物を配植した。

* 十五重層塔

十五重層塔は、京都大徳寺山内の孤篷庵庭園の層塔をモデルにしており、層塔は供養塔である。庭園の点景物として用いられるようになったのは、江戸時代に入ってからであり、庭園の中で灯籠と同様に景の中心として視線を集めている。

* 布泉の手水鉢

布泉の手水鉢は、京都大徳寺山内の孤篷庵庭園の手水鉢をモデルにしており布泉は中国の古銭を模したデザインで、庶民に広く富みを分布するという意味を表している。水鉢は中央に小さな穴を開け、この穴から清水が湧き出る仕掛けである。

6) 施工監理

施工監理は実施設計図に基づいて現場で中国造園技術者、日本造園技術者に地割、造成、石組、植栽、仕上げ等の作庭指示を行うことであり、設計者の設計意図、意匠感覚が施工監理で求められる。さらに、景石、植栽樹木等の材料の選定、石組の配石、植栽の配植指示、工事の流れ、工事の段取り、材料の手配、造園技術者の力量を見極め工事説明指示等を行い、すべてに目を配り、工期内に所定の工事を完成させることである。

特に海外では、日本の造園技術者、日本の役所担当者、相手国の造園技術者、役所担当者との連携が特に重要で、このチームワーク作りが成功の鍵をにぎっているとも云える。さらに材料が工事の進捗に合わせて適切に現場に搬入されるかである。役割分担、指示系統、工事進捗状況での適切な材料手配、適切な機械手配、他建設工事との調整、労働者の手配についても心しなければならぬ。これら工事に関わる事項と、工事を進める上での問題に対して、決定、指示をすることが施工監理の内容である。

(1) 石組石材、樹木の選定

遠く離れた山や川、苗場での石組石材、樹木の選定は、設計意図を反映すると共に、材料選定場所で滝石組、流れ石組、護岸石組、捨て石組等に相応しい石材、樹木を選定すると同時に、材料の持ち味によって滝組の構成、流れの構成を検討することが出来る重要な時間である。石材選定、樹木選定ではまだ見ぬ恋人に出会う瞬間の時機を感じている。それゆえどんなに離れた山や、川、苗場でも出かけていく。(写真-5・6)

(2) 石組施工監理

現場に搬入された石材の中から滝、流れ、池、捨て石に適した石材を的確に選定、配石し、据え付けて行く。この時、造園技術者、機械オペレーターの意気が合うこととリズムが重要である。配石は石と石のバランス、勢い、全体のまとまりが大切であり、見る人を感動させる石組が求められる。中国では据え付け穴掘はすべて人力であった。(写真-7)

(3) 植栽施工監理

植栽計画に基づき苗場で選定した樹木が現場に搬入され、その樹木の形態によって配置場所を決定し、植え付



写真-5 本溪にて石組石材選定 98.6



写真-6 浄月潭にて樹木選定 98.6



写真-7 滝石組 98.6



写真-8 植栽 98.7



写真-9 東側より枯山水の全景 '98. 8



写真-10 雄滝の景 '98. 8



写真-11 雌滝の景 '98. 8



写真-12 西側より枯山水の全景 '98. 8



写真-13 松林の景 '98. 8



写真-14 露地庭の景 98. 8

けを一本一本指示することである。現場では建築、設備の出合工事状況から重機が使用出来ず、急遽人力で植栽できる規格に変更した。植栽に関しては松林（美人松）の植栽以外の高木はすべて人力による運搬、植え込みであった。もちろん植え穴掘は人力である。（写真-8）

（4）開館式

1998年8月23日の開館式前日まで手直し工事が行われていたがどうか式典に間に合い、開館式典が盛大に執り行われた。しかし、園路仕上げ後の盛土整形のおさまり、細部の仕上げ等が悪いのが残念である。後日補修工事をするとのことであるが気になって仕方がない。

3. 日本庭園作庭が今後の中国都市線化事業に与える意義

1) 日本庭園

日本庭園の思想、意匠の多くが、過去の各時代に中国から伝わり、日本で変化、発展して独自の技術、様式を生み現在見る姿に造り上げられた。かくして中国から日本へと文化の流れがあり、日本の自然風土、歴史文化に育まれて日本独特の庭園文化を造り上げた。

近年中国の各地で日本庭園が多く作られるようになり、日本庭園の技術、意匠が中国の造園文化に少なからず影響を与えていると考えられる。日本庭園を含め日本の造園芸術は今後、中国の造園技術発展のために参考として受け入れられると確信する。

さらに、現在の中国の経済開発、発展が益々進めば、造園、園芸の分野で公共、個人の需要が飛躍的に拡大し、有望なビジネスになると考えられる。

2) 長春市の公園

長春は1930年代に公園緑地が建設され、中国でも緑が最も多く都市全域に公園緑地が整備充実され「森の都」と呼ばれている。公園緑地の特徴は、市街地の多くの小河川、低湿地をすべて公園として带状公園を形成したこと、小河川を堰止め、人造湖をつくったため、ほとんどの公園が水辺に接し親水公園として整備されていることである。

長春市も経済成長にともない、市民生活に余裕が生まれ都市内に、より豊かな屋外空間やレクリエーション等

に対する社会的要望が起り、1990年代半ばから既存の公園緑地の再整備が行われるようになった。自然の風景を見立てて庭園にする日本庭園の手法は公園の再整備にも応用することができ、平成9年には長春市動植物公園に宮城・吉林友誼園の日本庭園が建設され今後の都市緑化事業の建設、維持管理のいい事例となっている。

3) 組織

前述のごとく日本と中国両国の公共と民間が協力して、友好という共通の認識で組織化出来ること、各担当者の役割と目的が明らかで情報がスムーズであることが重要である。

4) 造園材料

（1）自然石材

長春市から約7時間離れた本溪から運んだ友好会館の自然石は庭石としてとても素晴らしいものであった。中国は広大な国土を持っており、有望な造園用の自然石が各地に見られる。現在、あまり多くはないが中国から日本へ良質の自然石が輸出されるようになっている。しかし、所有権、搬出、輸送手段等に関する制約や問題点が多いのが現状である。この問題を解決出来れば造園への国内利用、海外（日本）輸出に将来益々有望と考えられる。

（2）加工石材

庭園には灯籠、水鉢、石塔、記念碑、橋、舗装等に加工石材を多く使用する。中国の加工石材は、材料品質、材料単価、加工費共に利用価値の高いものである。しかし、加工技術の不適切、仕上りの拙さ、加工日数に時間がかかりすぎる等の問題がある。日本の石材業者が韓国との業務提携でこの問題を解決し成功しており、今後日本の加工技術者が技術、品質等の面で中国に協力することで日本での需要が益々伸びると考えられる。さらに、都市建設のあらゆる場所に使用されることから流通とネットワークが重要である。

（3）植物

友好会館の植栽植物は長春市の苗場と、民間の苗場から選定し調達した。都市の造園緑化工事が国営で行われる中国では、造園用の緑化植物の生産が一部の大都市を除き、あまり発展していないのが現状である。従って民

営の緑化工事を行う場合には植物の入手に困難を生じることがある。今後益々都市の緑化が要望され、緑化植物が必要とされることから多品種の緑化植物、園芸植物等の生産技術と流通システムを早急に構築することが望まれる。中国では園芸、盆栽等に興味を持たれる人が多く、経済発展に伴う緑化産業の発展により、都市から地区、地区から住宅へと緑、花に対し日常的に親しみを感じるようになる事が考えられる。日本同様に特に若い世代に受け入れられるようになる。このことから、緑化植物、園芸植物、特に花木、草花の栽培と販売の事業はこれからの中国で、有望と考えられる。

5) 造園工事

(1) 施工業者

友好会館の施工業者は入札により民間の施工会社に発注された。日本で1年間造園技術の研修をしており、日本式の施工知識を身につけていたので庭園工事の段取りがよく、短期間でよく完成できたと感心している。造園緑化工事の請負業者の主流は国営企業であるが、今後は経済感覚に優れた民間企業の採用が望まれ、これら企業の育成が、造園緑化産業を発展させる意味からも重要である。

(2) 重機の活用

友好会館で使用した重機は、石組みに25トンレッカーと運搬用に8トンレッカーを使用した。1日の使用量が高額であるため途中から25トンを16トンにした。景石据え付けの掘削は全て人力で行い、植栽時には他工事の取り合いもあり、全て人力施工となった。全国の主要都市で建設が進められている中国では、重機の活用が工事の完成に大きい影響を持っている。従って、建設工事の工程管理と、それに基づく重機の配備計画が工事の進捗に重要な課題として今後取り組まれる必要がある。

(3) 労務、安全管理

地方出身の現場労働者、国営企業所属の労働者は、能力、態度、技術等が各々異なることから、労働者の向上と、工事内容における人選は大切である。また、特に地方出身の労働者は工事現場でも日常の軽装であり、作業靴もなく工事現場でのけがが絶えない状況であり、安全面での対策が急がれる。

(4) 維持管理

中国の造園技術者の中には日本にて技術研修を受けた人がおり、中国における庭園等の維持管理者の中に、経験のある中国造園技術者に加えて、日本での経験を積んだ技術者を加えることは庭園景観、緑の都市景観を作り、維持していくのに今後必要である。さらに、これからの都市緑化建設に大きな役割を果たすと考えられる。と同時に維持管理にも活躍が期待される。

4. おわりに

国際交流のシンボルとして日本庭園が作庭され、日本の建設技術、伝統芸術でもある造園技術の極めの細かさ、優秀さが世界中で認められつつある。さらに、造園建設が都市に魅力と、潤いをもたらすことから益々求められる時代である。造園建設は建設時の協力、完成後の利用、維持管理を通して、友好都市締結の絆をより強く確かなものとするのに有効である。庭園のみならず世界の都市の緑を見るとき、長い歳月を経て、人の心を和ませる素晴らしい都市の緑が創られてきたと思われる。都市の緑は生きているもので、時間をかけ、手間をかけその成長を見守り、育むことが大切である。

おりしも、本年5月1日から10月31日までの184日間中国雲南省の省都、昆明市金殿風景区にて「中国‘99昆明世界園芸博覧会」が日本を含め参加国87カ国、国連等国際機関39機関が、「人と自然—21世紀に向けて」をテーマにして開催されている。まさに花と緑による21世紀の国際交流と都市造りが中国から始まろうとしている。

これからの21世紀の都市作りには、国際博覧会、友好都市、姉妹都市として互いに協力し合い文化、技術、経済等多くの交流を通してお互いに学び生かすことがますます必要である。

なお中国長春市中日友好会館日本庭園の作庭により、中国及び日本で多くの方々と出会うことが出来た。特に大津市の山田豊三郎市長、中華人民共和国長春市の李述市長、高梨雅明元大津市助役、大津市国際交流課、公園緑地課のスタッフ、長春市外事弁公室のスタッフ、大津市緑地研究会、都市造園有限公司の方々にはご指導と助

言、協力を賜り最初から最後まで大変お世話になった。

さらに、平成10年12月12日から15日にかけて長春市で開催された中日都市問題国際シンポジウムにも環境計画学科学科長清水正之教授、坂本新太郎客員教授とご一緒に出席させていただき貴重なお話を聞かせていただいた。お世話になった多くの方々に記して心から感謝の意を表したい。